

資料涉獵余話

その86

明治10年代に阪谷 印譜集『鳥跡』(大正朗慮や日下部鳴鶴ら 10年)にみるように文人墨客によって見 篆刻の研鑽が積むグ 出された天龍峽は、 ループも出現してい

明治末期には天龍峽 (鎌倉貞勇氏『伊を世に出す動き』(日 那)5月号の「吉澤 本」新聞の日本避暑 白城」の論考参照)。

地投票で3位にな この篆刻ブームの火 る)とともに、大正 付け役の一人が、大 期にはその歴史と景 橋浩堂という篆刻師 勝に似つかわしく一 ・書家であるが、郷 大篆刻ブームが起こ 土では、浩堂につい った。天龍峽を世に ての直近の記載は 出す動きとともに、 『郷土美術全集 飯 田・下伊那 後編』 田・下伊那 後編』 かねて天龍焼(伊那 (新葉社 平成15年 7月)にも「生没年 焼」(大正11年)が開 発され、また一方で 不詳」の一語の記述

があるだけで、もう 「浩堂」の署名があ 忘れられた人になり 「雲騰致雨」(雲が つつある。しかし天 わきおければ雨とな 龍焼に篆刻のデザイ ン性を持ち込むとど たこと。中村不折は もに、峽谷の篆刻界 りのどっふりとし に及ぼした影響は大 た、どことなく愛嬌 きく、郷土にとつて のある独特の書体だ は忘れてはならない が、署名が、陶器の

「生没不詳」？ 大橋浩堂をめぐる

嶋 不濁

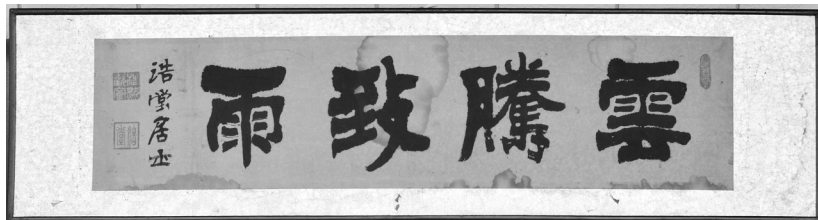
人だと思ふ。 この大橋浩堂につ いて、最近、三つの 発見があったので記 しておく。 書家では聞かない

一つは、南信州地 域資料センターに寄 贈された屏風や書額 を整理していると、

「南信」(明治35年) 昭和13年)にそんな 記事があったことを 思い出して、メモに 検索をかけてみた。 すると、大正4年9 月24日に「浩堂遂に 縊死す」の見出しの 記事が見つかり、こ の記事により「生没 不詳」とされていた 情報を下記のように 書き換えることがで きた。

記事によれば、大 橋浩堂は「佐賀県 服町三十番生まれに て東京市赤坂区福吉 町一番地に本籍を有 する篆刻師兼書家大

橋浩堂(47)とあり、さらに「数年前 当地へ来り専ら其技 を揮ひ好事家の需め に応じ当時相当の収 入ありしも周旋人の 為に喰はれて借財嵩 み拠どころなく本郡 龍江村尾林区中村強 輔方を借受て仮住し 同地尾林焼陶器の篆 刻をなし兎も角も糊 口しめたるが今後楽 境に立つ見込みもな さと借財に苦みしと の為二ヶ月程前より 精神に異状を来たし



述があり、47歳とい うからまだ名をなす 前に自ら死を選んだ ことになる。その年 齢から誕生は明治元 年前後ということも わかる。これが二つ 目。

三つ目は、それで は、とネットで検索 してみると、国会図 書館に、明治41年5 月に『篆刻宝典』(東 京、半月草堂)とい う著書が、今泉辰次 郎編でから刊行され ていることもわかつ た。

大正期の天龍焼の 隆盛の源になった、 郷土にとつては忘れ てはならない人だと 思うので、記す次第。